

国立公文書館の機能・施設の在り方等に関する調査検討会議 保存・利用支援等ワーキンググループ第1回会議への意見書

小島 浩之

1. 資料4に関して

- (1) デジタルアーカイブ機能と修復機能の連携を模索している点は大変先進的であり、さらに突き詰めていって欲しい。ただし、資料保存の枠組からすれば、デジタルアーカイブも修復もコンサベーションと呼ばれる具体的な方策・技術である。これらを統括しマネジメントできるようないわゆるプリザベーション部門の設立、人材の育成が望まれる。
- (2) デジタルデータは保存の不確実性や技術革新などから、アナログ資料とは異なる点でのランニングコストの増大が見込まれる。このため、どのレベルのデジタルデータを作成し、どういったしくみで保存・公開するのかについて、保存計画、技術、費用の各視点から適正ラインを指針として示すべきである。なぜならば、これが不透明・不適切であると、国立公文書館が必要とするデジタル化作業のための施設、設備への初期投資費用を正しく算出できないだけでなく、ランニングコストにも大きく影響するからである。

2. 資料5に関して

- (1) 国立公文書館として資料保存全体の指針の策定が急務である。公文書館の使命や所蔵資料の特性に基づいて、「何を、どのような方法で、どこまで保存しなければならないのか」を明確にしなければ、個別具体的な情報を積み上げて全体としてバランス欠くものとなる。
- (2) 望ましい業務の流れや、施設の配置の適否を見定めるには、新本館とつくば分館との関係の整理が必要であると考え。全体の流れを一旦白紙に戻して、資料の受入から公開までのプロセスを両者一体として再検討し、費用対効果の観点から、施設、設備、人材の適正な再配置を模索すべきではないか。
- (3) 原本、マイクロフィルム、デジタルデータそれぞれにどこまでコストをかけるかは、いわば経営判断の一つに属する問題でもある。他に代替の効かない公文書という資料群の性格からすれば、原本が最重要であってこの保存には最大限のコストを投じてしかるべきであろう。マイクロフィルムやデジタルデータでは内容情報を保持できても形態情報を保持できないという弱点があるが、文字という内容情報が重要視される公文書においては、複数媒体で内容情報のみを維持することも長期的には重要なこととなる。デジタルデータはコピーを複数箇所でも保存し、既存のマイクロフィルムもできるだけ保存したい。ただしマイクロフィルムのうち、劣化が避けられないTACフィルム（およそ1980年代以前に製造）で既に劣化しているものは、放出される酢酸が他の資料や、施設、設備さらには人体に与える影響も皆無ではなく、そのままでは、低温低湿での保存という多大なコストも必要となる。このため、劣化した閲覧用フィルムは思い切って破棄し、ネガについても保存用の複製フィルムを作成の上で、劣化した元ネガは破棄するなどの決断も視野に入れるべきである。